

特定非営利活動法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより

Museum Watatsuminokoe Newsletter

No. 17
2023.6.7

平和のための遺書・遺品展

「学徒出陣」八〇周年——こいつと

(一〇月二〇〜二四日、有楽町朝日ギャラリー)

館長 岡田裕之

I

本年は、八〇年前の一九四三年一月、徴兵猶予停止により大学高専(文系)に学ぶ学徒が、国家の要請に従って学業を捨てて戦場に赴き、多くの学徒が戦死した、「学徒出陣」の記念すべき年である。「わだつみの悲劇を繰り返すな」と五〇年に設立した日本戦没学生記念会、及びこれを継承する当記念館は、毎年、一月一日を「不戦の日」とし集会を開いてきたが、学徒出陣の一〇年毎の節目の年には、全国の大学で集中して集会・講演会を開き、声明を発表してきた。とくに出陣世代の生存者が軸となつて実施した、一九九三年の五〇周年記念の全国キャンペーンは大きな成果を挙げた。

一九四三年一月二日、文部省(及び学校報国団本部)が主催して、東条首相の激励演説に応じて出陣学

徒代表が「生らもとより生還を期せず」と述べた、明治神宮外苑の学徒出陣壮行会が行われた。記念館は、この二二日に合わせ、一〇月二〇日から二四日の期間に、有楽町朝日ギャラリーにて「平和のための遺書・遺品展——「学徒出陣」八〇周年——」を開催する。

八〇年前の事態はたしかに「歴史の領域」に入りつつあつて、三〇年前には壮健だった七〇歳台の出陣世代はほとんど生存されていない。ところが冷戦が終わつて世界はおおむね、平和な国際分業と相互交流の時代を享受していたのに、昨年来のロシアによるウクライナ軍事侵攻によつて、世界は突然のように現実の戦争に直面する。報道は戦争の苦悶を連日リアルに伝える。ロシアは平和を維持すべき国連安全保障常任理事国G5のメンバーでありながら、外国であるウクライナを自国の「生命

線」に設定して、NATO加盟阻止から政権転覆までを狙い、公認の国境を越えて軍隊を進め、ウクライナ東部地区を自国の領土に編入している。しかもロシアは核大国であり核使用さえ仄めかす。

戦争は対岸の火事ではない。現代中国は、急激に経済力、軍事力を強めて覇権をアメリカと争う大国となり、南シナ海の支配を求めて近隣諸国と対立し、また独自の政治社会信条を掲げる台湾を「中華人民共和国」に軍事的に吸収すべく戦略を立てている。台湾有事である。徒に「危機」を強調すべきではないが、しかし、国際政治の動向は予断を許さない。遺書展は現在の〈戦争と平和〉のこの焦点に合わせて組み立てねばならない。

II

先のアジア・太平洋戦争は日本の中国侵略から始まった。日本は、中国東北地方の満州と内外蒙古を日本の生命線とし、一九三一年、満州事変を起こして「満州国」を立て進ん



撮影/斎藤 尚義

入館案内

開館日 月・水・金
(祝日・夏季・冬季休館あり)
時間 午後一時〜四時
*団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。
入館料 無料
*エレベーターもあります。
*資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。
*アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」下車七分

で華北に侵入、三七年、中国と全面戦争となる。中国民衆の抵抗とともに戦争は泥沼化し、アメリカによる石油禁輸から四一年、日本は米英蘭と開戦、ヨーロッパの独ソ戦と重なつて全面的な世界戦争に至る。日中戦争の侵略と悲惨は、渡辺直己(広島高師)、松永茂雄、龍樹兄弟(國學院大)、篠崎二郎(同志社大)などの学徒兵の遺稿に記されている。日本軍は太平洋戦争の初期の勝利により、戦線をマレー、シンガポール、フィリピン、ミャンマーからニューギニア、ソロモン諸島へ広げるが、四二年、ミッドウェー海空決戦に敗北、四三年、ガダルカナル島を失つて、敗勢は決定的となる。各地の苦難の状況は、宇田川達(早大)、田村正(東大)、などが記す。

は言え「聖戦」に疑問を抱き、或いは公然と、或いは秘かに日記に、反戦を書きつけた学徒は存在した。佐々木八郎(東大)、松岡欣平(東大)。このまま学業を続けたいとの遺稿のなかには、とくに学芸・文化と軍隊・戦争は本来的に両立しない、し難い、と整然と書き遺した文章は、原亮(慶大)、中村徳郎(東大)、など数多い。遺稿の主題は多岐にわたり、それぞれに要約は尽くせないが、世界戦争を「自由主義」と「全体主義」の戦争とし、全体主義の敗北は明白、と断定した上原良司(慶大)はよく知られている。永田和生(京大)は四三年のイタリア降伏に際し、イタリア内戦とともに「第二戦線」をめぐる連合国(米英ソ)間の対立を分析し、戦後の冷戦を予測するかのようだ。専門研究に即した遺稿では、歴史学の柳田陽一(京大)は歴史に抵抗すべくして「流される」苦痛を記し、林尹夫(京大)は時代を生きてこそ「歴史」を理解できるのに自分の世代は「祖国の為の死、pas patria mori」で滅び行く、と敗戦直前、狂わしいまでの手記を遺す。

かくして学徒出陣八〇周年の本年は、ウクライナの現実の戦争のさなかにある。日本国民はこの事態にあつて平和を確保し、戦争を止めさせる努力を惜しんでならず、また政府一存、成り行き任せにしてはならない。朝日ギャラリー遺書・遺品展にご来場いただき、各人でそれぞれに〈戦争と平和〉の全体像を描いていただきたい。

「戦没東大生の遺稿展 — 学徒出陣八〇年」を企画して

新藤浩伸

二〇二三年五月一三〜一四日、東京大学五月祭並行企画として、東大本郷キャンパス教育学部において、「戦没東大生の遺稿展」学徒出陣八〇年」を企画実施した。私が担当する東大授業「博物館概論」受講者有志とわだつみのこえ記念館の主催で、記念館には展示品の貸し出しをはじめ大変お世話になった。二日間で約二五〇名の来場、学内外から小学生から九〇代の方まで、狭い展示空間は多くの方で賑わった。



学生作成によるチラシ

大学生と学徒出陣を考えた十年

この企画には前史がある。私は二〇一二年から記念館を授業受講者に見学してもらい、レポートを課すことを続けている。理由の第一に、博物館の展示を自分と関わらせながら見る姿勢を培ってほしいという思いがある。昭和後期生まれの私は戦争を知らない。しかし、祖父母から戦争体験や戦死した家族のことを日常的に聞いて育つ中で、非体験者には

非体験者なりの伝え方があるのではないかと考えていた。その折、偶然記念館近くを通りがかり、恥ずかしながら館の存在を初めて知った私は、展示に強く心を打たれ、ぜひ学生に訪ねてもらいたいと考えた。

第二に、東京大学と学徒出陣は以下のような意味で関係が深く、東大生は当事者意識を持ってこの問題に向き合えると考えた。周知の通り、学徒の送り出しを容認したこと。出陣学徒壮行会の代表は東大生であったこと。そして戦後『きけ わだつみのこえ』刊行に至る運動の起点となった『はるかなる山河に』は、東大戦没学生の手記として東大協同組合（後の東大生協）出版部から刊行されたことなどである。

第三に、教育学を専攻する私には、ともすると反戦平和というゴールありきになりがちな平和学習をとらえ直したい、という思いもあった。学生には、反戦平和を押し付けるわけではない、展示に即してできるだけ自由に考えてほしい、と求め続けている。それでも結論誘導的と言われしてしまうこともあるが。

展示見学を課してから十年の間に、少しずつ変化が生まれている。最初の頃は、祖父が学徒出陣組だったという学生が何人かいたが、今はほぼゼロになった。しかし、核の部分は変わらないと感じている。戦争を知らない世代であっても、それぞれに真摯にこの事実に向き合っていることが、学生達のレポートからは

伝わってくる。

気付かされたことも多い。記念館に展示されている学生は当然だが大学に進学した男性ばかりで、女性や当時の大多数である大学非進学者の姿は見えにくい。展示見学が悪しきエリート主義やヒロイズムを増長してしまつてはならない。とりわけ重要なのは、記念館の朝鮮人学徒の展示を通じて複眼的な視点を得られることだ。現在学生には留学生も多く、見方は当然異なる。一度学生と学徒出陣を語る時間を授業内に設けた折、その日は七月七日、盧溝橋事件の日であることに私は全く無意識だった。授業終了後にある中国人留学生から、授業で話せなかつた胸の内を吐露するメールが届き、自身の無知と無自覚を恥じた。展示を通じて、展示されていない物事に思いを馳せる知識と想像力の必要を感じた。

十年の間に授業の方法も試行錯誤を続けてきた。最初はただ見学してもらっただけだったが、のちに館の皆様に解説していただき、見学がままならなくなつたコロナ禍以降は収録映像の視聴も採り入れた。映像は、展示紹介の他、岡田館長と学徒出陣ゆかりの場所を東大構内に訪ねるものや、私がインタビューを行った出陣学徒の証言映像などを織り交ぜ、ネット上で受講者に限定公開して見てもらふこととした。

五月祭での企画へ

この試行錯誤の過程で、五月祭の企画もなされていった。昨年末の「不戦の集い」に参加した折、二〇二三年が学徒出陣八〇年であり、各大学で関連企画開催を望む記念館の声明に触れた。それにも触発されながら、記念館の皆さんと話し合うなかで、

五月祭で小さな展示を行うというアイデアが生まれた。早速過去の受講者に声をかけ、数名の学生がお手伝いを申し出てくれた。

準備着手の遅れから五月祭のパンフレットやホームページ掲載には間に合わなかつたが、五月祭並行企画として開催することとし、記念館との打ち合わせを重ねて展示内容などを詰めていった。東大生協にもぜひご協力を仰ぎたいと考え、生協を訪ね相談し、広報の協力のほか、現在生協書籍部に置かれている「きけ わだつみのこえ」の記載があるブックカバーを展示室に置かせていただくことが叶つた。

学生のフットワークは実に軽い。広報用の短い動画やチラシを作成してもらい、記念館ツイッターにアップされ、多くの閲覧者があった。



岡田館長（中央）による展示解説

二日間の展示から

期間中、三〇平米ほどの教室中央に展示ケースを配置して手記の現物を

を並べ、壁面にはホワイトボードで記念館作成のパネルを掲示した。テーブルも一台設け、パンフレットの他『はるか』『きけ』の各種版、岡田館長提供による関連資料などを置き、手に取ってもらふようにした。記念館作成により手記と文字起こしのコピーをファイルにし、展示されている箇所以外の頁も読んでもらえるようにした。初日には岡田館長による解説、また、大型ディスプレイでは二日間わたり映画『日本戦没学生の手記きけ、わだつみの声』（一九五〇年）ほか関連映像を上映した。

多くの来場者をお迎えできたが、記念館からの案内ハガキとツイッターを組み合わせ、多世代の方々に訴えることができたように思う。現職学芸員、歴史学者、民間教育文化運動に関わる方々など多くの方と交流ができ、様々な感想をいただいた。八〇年前の先輩と現役学生の共同作業がささやかながらできたのも、感慨深いことであつた。

一方で課題も残つた。最大の反省点は、展示の説明は記念館の方々でなければ十分にできないということだ。若い世代はただ過去の話を聞くだけではなく、学徒出陣という出来事の主体的な伝え手になっていくことの可能性が、今回の展示企画で見えてきたように思う。それでも学生達は来場者の質問に対して自身の言葉で丁寧に応えようとしていたが、それが希望の第一歩だろう。

今年秋には、学徒出陣八〇年をめぐる大きな企画が準備されている。学生達もお手伝いで参加予定だが、秋に向けて少しでもこの小さな企画がはずみになればと願っている。最後に、本企画にお力添え、ご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

初めて学徒兵の方の資料を拝見しました。てっきり「国や天皇のために戦えて光栄です」という言葉ばかりではないかと思っていましたが、大半が日常的な話だったり、戦争が早く終わってほしいといった話だったりして、年齢も近い分、本当に私（大学生）と変わらない人たちが死んでしまったのだなとやるせない気持ちになりました。なかには戦況や日本の当時の状況をしっかり把握し、自分の考えをしっかり持っている方もいて、こういった声が少しでも国に届いていたらと思います。現在、戦争反対や世界平和をあまり大声で叫ぶと嫌がられる風潮もありますが、声を上げ、聞き入れる姿勢はしっかり続けていけたらと願うばかりです。(2022.5.30)

インターネットでわだつみのこえ記念館を知り興味がわき資料を見ました。内容を見てみると昔の表現「せう」が多かったり、意外とひらがなが多いことに驚きました。この頃は右から左に読み、字は漢字とカタカナしかないものと思っていたのでふしぎに思いました。文も家族や妻や友人に送るのに敬語が多いことも気になりました。どうして敬語なんだろうと気になりました。枚数も1枚のはがきにびっしり書かれたものや、2、3枚のノート紙にどっさり書かれたものなどさまざま、家族や友人を応援したりして相手を気にして、自分についてはあまりふれてないものが多いと思いました。(2022.5.30)

いつも前を通り過ぎる際に気になっていたのですが、授業をきっかけに来館しました。自分よりも若い当時の学生が戦死し、生き残っても死刑になってしまったという事実がたいへん胸が痛みます。こういった悲しいことも伝えることでくり返さないことにつながると思います。(2022.6.10)

手紙に残された、死ぬ意味や自分のやっていることの意味を考えたくないが考えてしまうというような思いがとても心に残りました。また原本として状態が良いものも多く、遺品となってしまったこれらのものを、家族や関係者がどのような気持ちで保管してきたのだろうと思うと胸がしめつけられます。学徒兵は自分と年が近く自分も文科学生なので（実際同じ学科、研究室の人がいました）とうてい他人事と思えませんでした。(2022.6.10)

ロシアの侵攻で大東亜戦争当時の様子がまざまざと浮かび出てきた。軍備増強、憲法改正を、いつでも戦争するために声高にいう政治家を選択するか否かの参院改選も迫る中、よく似た状況にあるとここに来て思いました。戦中の日本から一足飛びに現在の日本に今や辿りつけます。日本の未来を担っていくはずの若者が兵士の数の一つの片として生命を断たれるレールの上を走らさ

来館者の「感想ノート」より

れた無念を思いました。(2022.7.1 大阪市)

大学に行く道でいつも見かける看板が気になり入館しました。何十万人の戦死者の one of them としての認識しなかった学生の方々のリアルな言葉や絵画、詩などを見ることで、たしかに生きていて、私たちと同じように青春を送っていたことを思い、深く心が疼きました。次の世代のためにも二度と再び戦争をしないこと、他国の戦火から一人でも多くの人を救い出せるにすることを目指したいと思っております。(2022.7.1 新宿区)

「わだつみのこえ」という本を読んでいたが、今から80年前に20代半ばの若者が戦争で死ななければならなかった現実と英霊の皆さまの生の声を読むにつけ私は感極まりました。日本国の今日の繁栄と平和は彼らの尊い魂の元にあることをありがたく思います。(2022.7.16 川崎市)

大学で上原良司さんについて学び、それをきっかけに以前から興味を持っていたこちらにお邪魔させていただきました。自分と同じ年齢の方々が相次いで戦死されたという事実、言葉では言い表せない気持ちになりました。手紙も勇ましい言葉ばかりでなく、写真を送りあうもの、日常を問うもの……ごく普通の家族愛にあふれたものが多く、たいへん貴重な資料に触れることができたと感じております。これらを展示していただいております。またゆっくりお邪魔させていただきます。(2022.7.20 文京区)

学校の自由研究で、戦争に関して記念館に来ました。実際に戦死した隊員の遺書を読むことでより深く理解することができました。また思いのほか戦死した年が今の大学生くらいの人がいのに驚きました。このことを機に学校の人にも伝えることができたらいいなと思います。(2022.8.15 世田谷区)

両親にあなたたちは戦争を知らないといわれていました。満州生まれの母にかつて話を聞き、父からは東京大空襲の話も聞きました。「わだつみのこえ」は読んでいたが、ここは初めてです。亡くなった学生たちは父と同じような年齢でした。父は病気のために兵隊にはなりません。改めて今の世界状況を考えると若い方々にここを訪れて頂きたいです。(2022.9.28 文京区)

無念に若い命を散らした方々の思いを少しでも受けとる機会をくださりありがとうございました。この時代に生き、この命をもって何をなしてゆくか、改めて思い返す

時間となりました。愚かな戦争は如何なる理由があっても起こしてはならない。命がどれほど大切か、天下を与えても代えられない命等々を子どもたちにも伝えていきませ。(2022.10.12 文京区)

戦時中小学生であった祖父から疎開先での話を聞き、祖母からは日本橋で見た大空襲の話聞いた。日本にいた祖父母でさえ戦争の災禍にあっているのに、戦地へおもむいた学生たちの気持ちを推測することはできない。学生に限らず当時の人たちの気持ちはもはや完全に過去のものになりつつある。ウクライナでは多くの人びとが犠牲になっている。平和を願う。(2022.10.14 大田区)

今、または数年で自分が戦死してした時代が日本でもあった、この時代でもそういう国がある、ということを感じさせられた。このような記憶を残す場所や物がキャンパスの中にあるか、近くも外にあるのかは今の学生がこのことを知るかどうか大きく左右すると思う。(2022.11.4 大学2年)

「無言館展」を神戸で見て以来、「将来のある学生が戦争へ行かねばならないこと」についてずっと考えていました。そして今、また戦争が起き、世界を巻き込む不安の中です。わだつみのこえ記念館で一人で展示を拝見するこの空間、悲壮だけではない雰囲気です。学生に多く足を運んでほしい、そして命を落とさねばならなかった彼らの無念をくりかえさぬよう、人間には考え、悩める知能や賢さがある。人が人を殺すような蛮行、この先もくりかえしたくない、その一心です。(2022.11.18 広島)

どこの国でも何があっても戦争はやるべきではない。人は人を助けることができる唯一の生き物で、人が人を傷つけてはいけない。頭で考え行動に移せる賢さを持って生まれてきたのだから。父の兄たちは戦死、戦病死をしている。どんな思いで家族と離れて何を思って亡くなっていったかを考えると心がえぐられる思い。もうこんな事で涙する人がいなくなることを心から願う。(2022.11.28)

国による圧力の下で国民、学徒が戦地に散った日本の悲劇の一方で、本気で国を守る覚悟のウクライナ国民とは比較できるものではない。本気で国を守る国民が育つためには魅力ある日本、夢をもてる日本の将来というものが不可欠。どうすればいいのか……(2022.12.12 70歳 男性)

東大3年生、21歳になりました。学徒出陣で亡くなった同年代の彼らが友人に重なる。過去ではなく未来に見える。自分と同じ年で生を終えた彼らの文字に、言葉に出会えてよかった。戦争が“今”に、“未来”になりませんように。(2022.2.6)

零 墨

中尾武徳は一九二三(大正一二)年三月三十一日、福岡に生まれた。福岡中学校を経て一九三九(昭和一四)年福岡高等学校(文科丙類(第一外国語がフランス語))に進学し、一九四二(昭和一七)年東京帝国大学法学部政治学科に入学、一年八カ月後の一九四三(昭和一八)年一二月「学徒動員」によって海軍佐保第二海兵団に入団、土浦海軍航空隊、徳島海軍航空隊を経て香川県の詫間基地に配属、神風特攻隊平水心隊の一員として一九四五(昭和二〇)年五月四日沖繩海域に出撃し戦死した。

一九九七年に画家で西南学院大学教授でもあった弟の中尾義孝編で『探求録』(權歌書房)という遺稿集が刊行されている。義孝のまえがきで、特攻隊出撃の前までの武徳の日記が敗戦の日に詫間基地で他の遺品とともに焼却処分されたこと、遺書とも思われる手紙を見て父母が詫間に面会に行ったときには、既にその前日の早晩に出撃した後であったが、戦死の事実は知らされずにそのまま帰されたことが記されている。

以前に郷里へ送っていた学生時代の日記、読書録や書簡のみが『探求録』に編まれた。

最後まで懸命に生きて証となったであろう日記が、日本国によって勝手に焼却されたことは、遺族にとって大切な武徳を二度殺されたようなものである。一家が武徳の戦死を知らされたのは、戦後になってからであった。

武徳は無類の読書家であった。福

岡高等学校一年生の一年間だけをとっても、長塚節、島崎藤村、横光利一、芥川龍之介、倉田百三、徳田秋声、山本有三、志賀直哉、川端康成、幸田露伴、賀川豊彦、佐藤義亮、島木健作、武者小路実篤、石川達三、阿部次郎、和辻哲郎、森岡外、高山樗牛、暁鳥敏、プーシキン、ドストエフスキー、ゴーゴリ、チェーホフ、ツルゲーネフ、トルストイ、アンドレ・ジイド、パール・バック、バルザック、ジュール・ルナール、ロマン・ローラン、シェイクスピアの四大悲劇、ベンジャミン・フランクリン自叙伝、オスカー・ワイルドなどの膨大な書物を変な熱量で読了し、思索を深めた箇所、わからないところなども率直にしたためた読書感想が日記の大半を占めている。同時に、高等学校の「ストーム(バンカラ行為)」、柔道の練習や試合結果のくやしき、上級学校へ進学するための手段ばかりを説く叔父への反発、人間存在の憂鬱など、若い魂の彷徨も時にユーモアをまじえながら綴られている。日中戦争が三年目に入った一九四〇(昭和一五)年、「皇紀二六〇〇年」の高等学校二年時にも、武徳の読書熱は衰えることがなく、古事記、紫式部日記、津田左右吉、プラトンやソクラテス、ベルグソン、ニーチェ、モパッサンなどを読み、人間とは何か、西洋と東洋の精神などについて思索を巡らしている。しかし次第に近衛首相の挙国一致内閣の「変革」を受け入れ、徳富蘇峰の吉田松陰論に影響を受けながら、戦争の可否について日本帝国の時流に沿った見解に近づいていった。

しかしそれは、野間宏の表現を借りるならば「十五、六歳から二十歳

代にかけて、ひとは無限の探求者の条件をそなえる。：ただちに補充されるエネルギー、血液は急速に更新され、：魂は新しい次元を見出して構造をかえる」(東大唯物論研究会・学生書房編集部編『生き残った青年たちの記録』学生書房、一九四九年、所収)ものであったが、武徳には「構造をかえる」時間が許されなかった。色川大吉は、もし死んでいたら「きけわだつみの声」の中でロマンチックに美化され、生き残った人たちが哀惜されていたかもしれないが、歴史の虚像、偽造で埋められた自分の日記を点検し、汚辱をこの手で葬り去ることができた。「生きていてよかった」(色川大吉「汚辱の」学徒出陣」東大八史会編『学徒出陣の記録』あるグループの戦争体験』中公新書、一九六八年、所収)と吐露した。しかし、繰り返さう。武徳には点検する時間が許されなかった。それが厳然とした事実である。

義孝はあとがきで「戦争はあらゆるものを奪い去った。はかり知れぬ犠牲の上に戦後五十年の歴史がある。再び戦争は繰り返さないと誓い、：生き残った者は：常に平和を悲願として生きてきた。：けれども：世界の何処かで戦争が繰り返されてきた。：どうして人間は愚かな争いを止めようとしないのか。何故に平気で大量殺人の兵器を造って戦争に備えようとするのか。われわれはあらためて：：：還つこない人々の、はてしなきわだつみのこえ』に耳を傾けなければならぬ。」と記した。現在の世界情勢や日本社会の対応をみると、武徳の懸命に生きた日々と、愛する兄を失った義孝のこの言葉が我々に突き刺さってくる。(直)

「ネットワーク」短信

- ◆文京ミュージズネット
文京区内にある博物館・美術館・庭園など三五施設(当館も加盟)の合同イベント「文京ミュージズフェスタ二〇二二」(二月一五、ギャラリースピック)に当館は戦没学生四名(岩ヶ谷、上原、宇田川、原)の遺稿(画像)・遺影・履歴を収めたA2パネル四枚を出展。来場者四〇四名。会場アンケート回答三九名。当館のパネルについては「胸が痛かった」「じっくり見学にゆきたい」との感想が寄せられた。
- ◆平和のための博物館・市民ネットワーク
オンライン学習会「博物館法改正と平和のための博物館」(二〇二二年一月二三日)開催。

短 信

- ◆催行行事
「不戦の集い」(二月一日)を対面・オンラインで開催。「学徒出陣」上映と講演「学徒兵 木村久夫の遺したもの」。講師 加古陽治。参加者九七名。アンケート回答二一通。会場にて「声明 学徒出陣八〇年を前にして」を発表。
- ◆「戦没学生への手紙」募集(六月)遺稿朗読会(七月) YouTubeで配信中
- ◆教育機関への協力
東京大学教育学部「博物館概論」。
- ◆マスメディアへ協力
NHK総合テレビ「そして 学徒は戦場に」(8/8)
- ◆NHKテレビ「BS1 スペシャル 山本五十六と「開戦」」(8/13 再放送)
- ◆朝日新聞東京版(11/27)

◆東京新聞したまち版(11/26)共同通信配信(12/6/8)掲載 三〇社

◆来館者
*開館日一六日。来館者五二〇名。
*ふだんの開館日は月・水・金の一時四時ですが、団体の場合は、曜日・時間等ご相談に応じます。解説もいたしますのでお申し込み下さい。

◆「寄付」
記念館の維持・発展のために会費(維持・賛助)やご寄付をお寄せくださった皆さま、また来館の折にカンパしてくださった皆さま、ありがとうございます。ございました。

特に本年は一月二〇日(二四日)に「平和のための遺稿・遺品展」『学徒出陣』八〇年」を開催いたしますので、格段のご支援をお願い申し上げます。

◆役員・スタッフ紹介
法人理事長・渡辺總子、記念館館長・岡田裕之、常務理事・岡安茂祐、奥田豊己。ふだんの記念館運営は岡田裕之、奥田豊己、広岡直子、深澤かよ子、渡辺總子があたっています。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。(W)

特定非営利活動法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより 第17号

発行日 2023年6月7日

発行 わたつみのこえ記念館

東京都文京区本郷5-29-13
〒113-0033 赤門アビタシオン1階
電話/Fax 03-3815-8571
E-mail: info@wadatsuminokoe.org
URL: http://www.wadatsuminokoe.com
郵便振替00180-1-3-612451

